



世界は変わる 君たちの手で

読売新聞教育ネットワーク記者 小川 祐二郎

前回大会から、出場校のみなさんの活動内容を紹介する「読売SDGs新聞」の編集・作製を担当している。お手元にも、この冊子とともに今回大会の内容を伝える新聞と一緒に届いているはずだ。この新聞を編集するために、全出場校の活動を文章と動画で確認するのだが、今回も「よくぞここまで」という報告が相次いだ。コロナ禍が続く中、これだけの質と量の報告が日本各地の高校生の手で作られ出した。

環境大臣賞に輝いたのは青森県立名久井農業高校。同校は例年、開発途上国の農業生産を改善するため、さまざまな妙案を雪国からひねり出してくる。

これまでに河川や湖沼の富栄養化対策として、水面に浮かべた筏（いかだ）の上で農作物を栽培し、水質浄化と食物収穫の両方をめざす方法を提案した。昨年は、乾期に貴重な雨水を集め、雨期に土壌の流出を防ぐため、玄関の三和土（たたき）に使われる日本伝統の技術を応用した。海外からの問い合わせも多いと言いつつ、このレベルの高さは大学の農学部でもまれなのではないだろうか。

今年は、乾燥地の死活問題である塩害を意外な材料で解決する技術提案だった。東日本大震災による津波で東北地方は塩害に苦しんだが、そのときは土壌に埋めた石膏に大量の水を加えて、塩害を抑えた。しかし、乾燥地ではそもそも水がない。では、どうするのか。今回は、その道筋が報告されている。

環境再生保全機構理事長賞の群馬県立尾瀬高校も、常連校だ。唱歌「夏の思い出」の舞台でもある湿原・尾瀬。その自然について、科学の眼をこらして高精度のフィールド調査を進めてきた。それに加え、今回はシカの食害で消滅しつつあるミズバショウの栽培・移植にまでこぎつけた地道な活動が評価された。

国連大学サステイナビリティ高等研究所長賞の愛媛大学附属高校は、大学生も真っ青になる研究成果をひっさげての出場だった。世界の共通課題である海洋プラスチック問題に挑み、休眠中の海洋細菌を天日塩から単離・培養して、環境中で分解するプラスチックを作ってみせた。「分解する」とうたってレジ袋に使われているバイオプラスチックの多くが環境中では容易には分解しないことも実験で確認。ジャーナリスト的な視点も光った。

読売新聞社賞を射止めた富士宮高校会議所は、静岡県富士宮市内の高校生たちがつくった学校横断の団体だ。市特産のニジマスの加工かすと朝霧牛の糞尿をまぜて肥料を作製し、これを使った農産物の加工食品を作るなど、地域の大人たちを巻き込んだビジネスモデルが高く評価された。高校生が選ぶ特別賞の長野県佐久平総合技術高校と先生が選ぶ特別賞の京都府立宮津天橋高校は、高校生らしいフレッシュな視点と行動力が他校から多くの票を集めた。

今回は入賞しなかったが、取材して記事にしたいという学校がいくつもあった。読売新聞社では朝刊全国版で「SDGs@スクール」という学校での取り組みを紹介するコーナーを設けている。私が所属する教育ネットワーク事務局も「2030 SDGsチャレンジ」というタイトルで学校での取り組みを応援している(<https://kyoiku.yomiuri.co.jp/sdgs/school/>)。

我こそはという学校があれば、迷わず連絡してほしい。

SDGsのスローガンは「私たちの世界を変革しよう」(Transforming our world)。これぞという自身のアイデアを国内外の仲間に伝えることも、目標17が示すように世界を変えるSDGsの手法だからだ。

2030 SDGsチャレンジ

◎スクール・学校の取り組み

読売新聞で毎日掲載しているコーナーを中心に、学校での取り組みを発信します



2021年10月28日
岡山県立大分南高等学校（大分・大分県
北小中学校）



2021年8月5日
SDGsの教員実践プロジェクト（熊本
県立高橋高等学校）



2021年7月28日
熊本県立豊後高等学校（宇都宮県立豊後
高等学校）

【写真は】SDGsに関する各学校の学びや取り組みを紹介する読売新聞教育ネットワーク事務局サイトの「2030 SDGsチャレンジ」コーナー

